

# 李退溪の郷村・地域編成論

－李栗谷・朱子との比較を中心に－

辺 英 浩

## I はじめに

中国朱子学成立の基礎には宋代に至ってようやく形成されつつあった封建社会があったが、社会の基底にある本来的封建農民たる佃戸＝小作農はいまだ経営主体としては未熟であった。のみならず佃戸の未熟さに規定され、地方の自立性もいまだ未熟であり、そこへ強大な朔北の遊牧民の脅威に晒されていた。朱子（1130～1201年）はこの強大な外圧に対処するべく統一権力の絶対性を主張すると同時に、幼弱な佃戸の育成を追求していた。朱子の理気論において気は個別的・差別的範疇、理は全体的・普遍的範疇であるが、朱子学は理の気に対する根源性・超越性を追求する主理主義＝全体主義であり、その具体的な内容は国内における未熟な個別（佃戸・地方）と強い外圧に規定された統一権力＝全体の絶対性の主張であった。こうして、宋代に朱子に代表される主理主義＝全体主義が成立し、以後長期間思想界のオーソドキシの地位を維持したのである。だが、明代中期に至って佃戸の成熟とそれを基礎とした地方の自立性の増大を背景として個別性を意味する気が相対的に拡大される思想潮流が形成された。この場

合でも個別性・差別性を意味する気が全体性・普遍性を意味する理よりも重視された訳では毫もないが、一応便宜的に朱子的な主理主義と区別するために主氣主義＝個別主義と呼んでおく。朝鮮でも中国同様に封建思想としての朱子学が受容されて李朝の体制教学とされたが、16世紀に主理主義の李退溪（名は滉・字は景浩・退溪は号 1501～1570年）と主氣主義の李栗谷（名は珥・字は叔獻・栗谷は号 1536～1584年）によって完成されるごとく、退溪的主理主義と栗谷の主氣主義が同時期に成立し、以後も並存していくのである。この退溪と栗谷、両者の相違を拙稿「朝鮮封建ナショナリズムの構造と展開」においてナショナリズムの視点より検討を加え、両者の想定する世界とは朝鮮を個別として含む冊封体制全体であり、中国（皇帝）と朝鮮（国王）との関係において退溪は冊封体制全体の統括者である中国皇帝の絶対性を強調し、栗谷は中国皇帝の権威の否定にまでは至りえていないものの個別である朝鮮（国王）の位置を拡大していたことを明らかにした<sup>(1)</sup>。

ところで全体と個別とは、様々な次元で想定しうるのであるが、以上で述べた冊封体制全体（または中国）と朝鮮との関係もそのひとつである。本稿では全体と個別との視点より、郷村・

(1) 辺英浩「朝鮮封建ナショナリズムの構造と展開」『近代とは何であったか』岩間一雄編、大学教育出版

社、1997年

地域内の支配者である在地土族（兩班）と被支配者たる下人（身分的には良人と賤人、生産関係的には自作農と小作農）、また官＝統一権力と地域（とその実質的支配者である在地土族）との関係を検討し、全体の絶対性を強調する退溪と個別性の相対的拡大を強調する栗谷との相違を明らかにしていく。筆者はかつてこのような観点より栗谷と朱子との比較研究「李栗谷の郷村、地域編成論」を発表したが<sup>(2)</sup>、ここではそこでの結論を前提としつつ、退溪を中心とした分析を行いたい。さて分析に入る前にこの点に関わる退溪の基本史料についての検討から始めたい。

## II 礼安郷立約条

退溪の郷村・地域編成に関する史料としては、まず第一に礼安県にて作成された「郷立約条序[附約条]」（以下では郷立約条と記す。〔 〕内は割註。以下同様）が従来注目されてきた。年譜には「一五五六年（退溪五六才）十二月、郷約を草す。〔是の時、国に郷徒の令有り。先生約を草す。事に因りて行なうを果さず。〕」とある<sup>(3)</sup>。（ ）内は引用者。郷立約条は序文と罰条とからなるが、まず序文において実施主体が郷所であることを明らかにしている。

「古えは郷大夫之職、之を導くに徳行道藝を以てし、而して之を糾すに不率之刑を以てす。士為る者は亦た必ず家を修め郷に著わす、而して後以て賓興を国に得る。……今之留郷は、則ち古えの郷大夫之遺意也。人を得れば則ち一郷肅然とし、人に匪ざれば則ち一郷解体す。而して況んや郷俗之間は王靈より遠ざかり、好悪相い攻め、強弱相い軋る。孝悌忠信之道をして、或いは<sup>とど</sup>尼めて行なわざらむれば、則ち礼儀を棄て廉恥を捐てること日々に甚だし、流れて夷狄・禽獸之帰と為る。此れ実に王政之大患也。而して其の糾正之責は、乃ち之を郷所に帰せり。嗚呼、其れ亦た重し。」（「古者郷大夫之職、導之以徳行道藝、而糾之以不率之刑、為士者亦必修於家著於郷、而後得以賓興於国。……今之留郷、則古郷大夫之遺意也、得人則一郷肅然、匪人則一郷解体、而況郷俗之間、遠於王靈、好悪相攻、強弱相軋、使孝悌忠信之道、或<sup>とど</sup>尼而不行、則棄礼儀捐廉恥日甚、流而為夷狄禽獸之帰。此実王政之大患也。而其糾正之責、乃帰之郷所。嗚呼、其亦重矣」）。

ここから、郷立約条はすでに先行研究によって指摘されているごとく郷規、或いは郷規的郷約であることが判明する<sup>(4)</sup>。当時の行政単位は数個の自然村落を編成したものと推測される

(2) 辺英浩「李栗谷の郷村、地域編成論」『朝鮮史研究会論文集』29号、1991年10月。なお朝鮮史において村落を意味する郷村、里、洞などの史料用語が、そのまま封建的村落共同体を意味するとは限らないが、李朝の基底に封建的村落共同体の成立を推断しうことは、同拙稿149～152頁、注(2)(25)参照。

(3) 「年譜中」『退溪全書』四、景仁文化社、1971年、125頁

(4) 田川孝三「李朝の郷規について（一）」『朝鮮学報』第76輯、1975年4月、37～43頁。また本文にて後述するごとく『朝鮮時代 社会史研究史料叢書（一）郷約』（金仁杰・韓相権編、保景文化社、1986年）に所載の

郷立約條が完全な原文であると判断されるが、31條の約條を順次、極罰（7條）・中罰（16條）・下罰（4條）と区分し、最後に末尾に約條4條（「元惡鄉吏 人吏民間作弊者 貢物使濫徵價物者 庶人陵蔑士族者」）を記し、それぞれの罰則内容を記している。末尾の四條は「已上隨見聞、摘發告官、依律科罪」とされ、官にて処断するという点で、極罰の上罰という最大の処断内容に匹敵するものである。（已上極罰上中下〔上罰、告官司科罪、不通水火。中罰、削籍、不齒郷里。下罰、損徒、不与公会〕。何故にこのように重罰が罰條の最後に付屬的に書き加えられているのであろう。それは極罰・中罰・下罰に配された条目は士族のみを対象と

「里」を最底辺とし、その上が数個の里を編成した「面」、その上が数個の面を編成した「州・牧・郡・県」（基本的には相互に対等の行政単位、通常は「郡県」、「州県」と略称）であり、この郡県が地方官の派遣される行政単位であった。当時の朝鮮史は、最底辺の直接生産者である小作農までが自立的生産主体である封建段階にあったが、中国・満州・日本という3方向からの外圧に抗するべく集権的官僚制形態をとる李朝としてあった。在地士族たちは、自己の利益を代表する機構として郷所（または郷庁・留郷所とも呼称）を設立し地方官の補佐をするべく国家的公認を受け、その役員選出に際しての選挙人、被選挙人名簿としての「郷案」を作成していた。郷規とはこの郷案に登載された在地士族組織運営のための規約である。ちなみにこれらの国家的公認を受けた在地士族の組織は、同じ歴史段階にあった宋代以降の中国には見られないものであった。

さてこの史料の利用に際しては史料批判が必要である。現在李退溪学研究のために広く普及している『退溪全書』一～五（李佑成編輯、景仁文化社、1971年）と『陶山全書』一～四（退溪学研究院、1988年）に全く同じ内容のものが所載されているが<sup>(5)</sup>、『朝鮮時代 社会史研究史料叢書（一）郷約』（金仁杰・韓相権編、保景文化社、1986年）の「郷立約条」<sup>(6)</sup>には、前の2史料には見当たらない書き加え部分が見られる。編者の解題（5頁）では出典を『退溪全集』卷四十二と簡単に記すのみである。ちなみに『退溪全集』なるものは存在しないので、こ

れは『退溪全書』の誤植であろう。これは編者がよく確認しないで、『退溪全書』所収の史料と同じものと思こんでいた手直にあった別の版本から退溪の当該史料を引用・掲載したものであると思われる。

「郷立約条」の序文には相違は見られず、書き加えがあるのは次の約条部分の5箇所である。前の二史料は全体で31条の約条を順次、極罰（7条）、中罰（16条）、下罰（4条）に分類し、最後に末尾に残りの約条4条（「元惡郷吏 人吏民間作弊者 貢物使濫徵價物者 庶人陵蔑士族者」）のみを記しているが、各罰の内容に関する具体的な記述がない。『社会史研究史料叢書（一）郷約』では各罰の下に具体的な解説が付されている。〔 〕内は割註部分。

- 1 已上極罰上中下〔上罰、告官司科罪、不通水火。中罰、削籍、不齒郷里。下罰、損徒、不与公会〕。
- 2 已上中罰〔郷中從輕重、施罰〕。
- 3 已上下罰〔座中或面責施罰〕。
- 4 末尾の約条4条の罰則は「已上隨見聞、摘発告官、依律科罪」。

もう一つ、中罰の各条の最後に「多接人戸、不服官役者 不謹租賦、図免徭役者」という二つの条目の書き加えがある。

まずこの「多接人戸、不服官役者 不謹租賦、図免徭役者」の二条であるが、これは実は退溪の弟子の金圻が1602年に安東都護府にて作成した郷約の過失相規の項目にも見られるものである<sup>(7)</sup>。金圻の郷約は、朱子の郷約にある徳業相勸・過失相規・礼俗相交・患難相恤の四条目を

ゝしており、末尾の四条は「元惡郷吏 人吏民間作弊者 貢物使濫徵價物者 庶人陵蔑士族者」というごとく、士族と「郷吏・人吏・貢物使・庶人」との関係を規定した条目だからであり、条目の次元がそもそも異なっているのである。ここからも郷立約條は郷案に登録された士族が対象とされていることを知りうる。

(5)それぞれ『退溪全書 二』351～353頁、『陶山全書 三』退溪学研究院、1988年、62～264頁

(6)前掲『朝鮮時代 社会史研究史料叢書（一）郷約』24～25頁

(7)前掲『朝鮮時代 社会史研究史料叢書（一）郷約』47～52頁 吳世昌・鄭震英・権大雄・趙康熙編著

基礎として、退溪の郷立約条の過罰条と朝鮮固有の洞契の吉凶吊慶・患難相救・春秋講信が結合させられ、また過失相規の条目に下人約条を別個に設定したもので、17世紀以降一般化していく郷約の範型となった特筆すべき郷約といわれる<sup>(8)</sup>。この中で過失相規にほぼ退溪の過罰条を用い、その中罰の最後に上の二条「多接人戸、不服官役者 不謹租賦、図免徭役者」を加え、「多接人戸、不服官役者」の下に「約条は一えに退溪先生の定むる所に遵がい、而して此の下二条今補ふ」と説明が加えられている。

さて先に年譜での説明にあったごとく、退溪の郷立約条は「事に因りて行なうを果さず」と実施されなかったのであるが、その間の事情を門人の琴蘭秀は1598年に以下のごとく記している。『「退溪先生郷立約条後識」退溪先生、閔郷風之渙薄、著成約条、送郷射堂掛壁、而其時郷人、有議論不一者、先生還取而藏之、今於先生文集、傳寫揭于郷射堂、以遂先生遺意云、萬曆戊戌秋郷人琴蘭秀書』<sup>(9)</sup>。

退溪の郷立約条は土豪の武断的行為を規制する条文が多々あるが、特に「多接人戸、不服官役者 不謹租賦、図免徭役者」の二条が士族の一致した理解を得られなかったため「議論不一」として実施されなかった。「多接人戸」とは土豪の長籬内に多くの漏戸を隠し、漏戸の負うべき貢納、租、徭役、軍役などを拒絶するもので、退溪の郷立約条はこのような国役負担を忌避・拒否する土豪的行為を強く規制するものであった。ともかく退溪の郷立約条は一部の士族たち、すなわち土豪たちの反対で実施できず、李退溪の文集からも削除されていたのだが、金圻は郷

約を起案する時に、師の意志を尊重、継承しようとし、この二条を復活させて「此の下二条、今補ふ」（「此下二条今補」）と注記したという<sup>(10)</sup>。すなわち、この二条については『社会史研究史料叢書（一）』所収の郷立約条が退溪の草案した原文なのである。

次に各罰条の割註と末尾部分の「已上随見聞、摘発告官、依律科罪」である。この点は同じく『社会史研究史料叢書（一）』に所収の「光州郷約条目」と金圻の「郷約」が参考になる。『光州郷約条目』の序文には「景泰二年辛未、即我

文宗元年、先生与本邑県監安哲石進疏、天陞升県為州牧、因勅立喜慶堂、而抄選境内士子文章德行門閥顯著者九十員、書置別籍、以正郷綱、又行郷約」<sup>(11)</sup>とあり、1451年に先生である李先齊と光州県監であった安哲石とで、「境内の士子で文章・德行・門閥の顯著なる者九十員を抄選し」作成した、士族のみを対象とした郷規約的な郷約である。解題にて「ここで特に注目されるのは条目の内容が退溪の〈礼安郷立約条〉とほとんど同じだという点である。したがって記録をそのまま信用したならば李先齊が作成した郷約が退溪郷約の先駆となる訳である。」（7頁）とこの史料の価値に触れている。しかし解題では続けて、「しかしこれにそのまま従うには多くの難点がある。したがってこの二つの郷約の間の先後関係に対する緻密な考証が要求される」と、「多くの難点」とは何かが明らかにされていないが史料の作成年代に対する慎重な留保を付している。正確な作成年代はともかくとして、本論との関係で興味深いのは各罰条の内容である。ここで金圻の郷約も含めて各

『嶺南郷約資料集成』嶺南大学校出版部、1986年、113～117頁

(8) 金龍徳「金圻郷約研究」『朝鮮後期郷約研究』郷村社会史研究会編、民音社、1990年、119頁

(9) 前掲『嶺南郷約資料集成』111頁

(10) 前掲金龍徳「金圻郷約研究」107～108頁

(11) 前掲『朝鮮時代 社会史研究史料叢書（一）郷約』2頁



郷約の上罰・中罰・下罰・末尾の罰目の順序に整理すると以下のごとくである。

### 1、光州郷約

以上等罰論之、執綱稟官、依律科罪。

執綱發文境内、齊会郷社堂、施以中等之罰。

自座上、或面責、施以下等之罰。

執綱亦稟官、依律科罪。

### 2、退溪の郷立約条

已上極罰、上・中・下〔上罰、告官司科罪、不通水火。中罰、削籍、不齒郷里。下罰、損徒、不与公会〕。

已上中罰〔郷中從輕重、施罰〕。

已上下罰〔座中或面責施罰〕。

已上隨見聞、摘發告官、依律科罪。

### 3、金圻の郷約

已上極罰、上・中・下。上罰、告官司科罪、不通水火。中罰、削籍、不齒郷里。下罰、損徒、不与公会。

已上中罰。上罰、告官司科罪。中・下、從輕重、施罰。

已上下罰。上・中・下、或面責施罰。

已上隨見聞、摘發告官、依律科罪。

この三つは、多少の表現上の差異はあるが、ほぼ上罰と末尾の罰条が官に告げ処断する程度、中罰と下罰とは郷中で独自に処罰する程度とされ、大変類似した内容となっている。(中罰の内容ははっきりしないが、下罰が面責なので、中罰はそれよりやや重い罰とされていると推測される)。特に退溪の郷立約条と金圻のそれとがほとんど同じであるのは、先に述べたごとく金圻が郷約を起案する時に、師の意志を尊重、継承しようとしていたことを想起するならば、至極自然なことである。

そもそも退溪の約条が実行性を持つためには、

罰条の内容が具体化されていなければならない。かりに『退溪全書』のごとく各罰条の具体的な内容が記載されていなかったとすれば、別に罰条内容を記した文章があるか、それがない場合には罰条の内容が説明の必要もないほどに当時の構成員とされた士族たちにとって自明のものであった、と考えるのが自然である。しかし、金圻の郷約などを見ると、罰条内容を別の用紙に記す特別な理由、それは内容が長文になるためなどしか考えにくい、他の郷約類の例からみてそのようなことはありえそうもないし、また罰条の具体的な内容が構成員にとって明記するまでもないほどに自明であったならば、金圻の郷約を初めとした他の史料でも当然その様なものが多く見られて良いはずであるが、そういうこともみられない。『社会史研究史料叢書(一)』に所収された退溪の郷立約条をそのまま退溪のものと受取って良いのではなからうか。罰条の内容も、先の「多接人戸、不服官役者不謹租賦、図免徭役者」の二条が『退溪全書』から削除されていたのと類似の事情があり、『社会史研究史料叢書(一)』には偶然に『退溪全書』にて削除される前の退溪の原文が掲載されていたと考えるのが自然であろう。

## Ⅲ 温溪洞契

さて『嶺南郷約資料集成』に退溪の後孫である李氏門中にて所蔵されていた「温溪洞規」が発掘・収録されており、これは退溪の居住地であった温溪里を中心として実施された「温溪洞契」(1548～1625年)と温溪洞に隣接する溪上洞を中心として実施された「溪上洞契」(1677～1846年)とからなっている<sup>(12)</sup>。なお年代は冒頭に記された注書によるものである。この「温溪洞契」によって、ようやく退溪学の基底に存

在するものを検討しえる手がかりを得られるようになった。これは『退溪全書』や『陶山全書』にも収録されておらず、『朝鮮時代 社会史研究史料叢書 (二) 郷案・洞契』には「退溪先生〔温溪〕洞中族契立議」(所蔵所は、一蓑文庫古図書 貴170-J868j)と題されたものが収録されているが、これは上の「温溪洞契」の一部に過ぎない。

「温溪洞契」は1554年に「温溪洞中親契立議叙」と「吉事」・「凶事」・「講信」に関する条目が退溪によって作成され、その後退溪によって1560年に11箇条の「洞令」とその説明文が添加されている。更に1615年には1554年以降に追加されてきた9箇条の「契中約条」が載せられている。また「洞員」「洞中有司」「扶助簿」があり、有司が1548年から選ばれていることから、「温溪洞契」は遅くとも1548年以前に実施されていたことが判明する。構成員は真城李氏とその女婿・外孫である。温溪洞契は一名、温溪洞中族契とも呼ばれているように、女婿・外孫までを同族とみなし、彼らが集中的に居住する温溪洞を中心として、その周囲の洞に居住する同族までを含めて実施されていた<sup>(12)</sup>。「洞員」は1615年に「温溪洞契」を粧冊し直した際の前後に追って入った者を年齢順に記録している。ここには退溪の嫡子の寓と庶孽の寂の名前も見え、特に寓は洞中有司にも何度か選ばれており、「温溪洞契」運営の中心的な実務担当者のひとりであったようである。

温溪洞契の構成員と内部編成はどうなっているのであろう。真城李氏の同族とみなされた士族が構成員であるのはいうまでもなく、そこに

は退溪の庶子の寂の例からわかるように庶孽も含まれている。その他の良人と賤人については書簡中にて次のように言う。

「所謂公私賤者、古所無。而今亦自不当入学与郷、在所不論。此外如有稍微賤、羞与同列者、不幸而在学与郷、力能攻而遂去之、則可。不可遂、則以他事善處、使不得恒随行次也。二者皆不可得、則只得從叙齒之説、以謹守。先王立教之本意、別無他道理、可善處也。蓋我自以礼法尽居郷之道、彼之微賤、焉能浼我哉。公能於平日克去欲、上入之心而見得道理、平実純熟、則此等處、自当洒然無疑矣。」『陶山全書 三』152～153頁、卷第五十四「答趙起伯」戊辰(1568年)。

この退溪の最晩年にあたる戊辰(1568)年の書簡で、賤人については明瞭に「所謂公私賤は古しえ無き所なり。而して今亦た自ずから当に学と郷に入るべからざるは論ぜざる所に在り」と断言している。良人身分については「此の外もし稍や微賤にして同列に与かるを羞ず者有りて、不幸にして学と郷に在れば、力めて能く攻めて之を遂去して、則ち可なり。遂うべからざれば、則ち他事を以て善處し、行次に恒随するを得ざらしむるなり。二者皆得べからざれば、則ち只だ叙齒之説に従ひ以て謹守するを得のみ。先王立教之本意、別に他の道理無し、善處すべきなり。蓋し我自ずから礼法を以て居郷之道を尽すのみ、彼之微賤なるもの、焉くんぞ能く我を浼さんや。」といい、良人も可能な限り排除・追放するようにする。やむを得ず良人が入る場合は、年齢によって座席を定めるようにする<sup>(14)</sup>。

また洞令の説明文では次のように言う。

(12) 前掲『嶺南郷約資料集成』120～129頁

(13) 鄭震英「解説篇」『嶺南郷約資料集成』10～12頁  
鄭震英「16世紀安東地方の洞契」『嶺南史学』創刊号、嶺南大学校国史学会、1985年12月

(14) この場合、史料を素直に読めば、士族、庶孽、良人の身分的差異に拘わらず、全員を年齢によって序列化しているようである。もしそうであるならば栗谷が、社倉契約束にて上の人と下人とを大きく区分し、

「右の洞令設立の本意は、洞中の居人は皆家門の奴婢なるに……」（「右洞令設立本意段、洞中居人、皆家門奴婢」）というごとく、温溪洞契の実施した地域では士族とその家門の奴婢（＝私賤）しか居住していない、典型的な両班の同族村落であり、良人はいない。当然、先の史料に従えば、私賤が構成員でないのは論じるまでもないし、仮に良人が居住していたとしても構成員に加える可能性は零に近い。この時期の史料では良人と賤人をまとめて下人と言うが、退溪にとって下人は郷村の主体ではないのである。こうして構成員とされた士族は年齢にしたがって序列化され、座席も決定される<sup>(15)</sup>。

「郷党の序齒、年之長少を以て坐次と為すなり。もし貴賤に分てば、則ち是れ序爵なり。……豈に一時一郷の一二人の微賤（の者有りて）其の下に居すを恥ずを以ての故に、軽く古今不易之典礼を変へ、父兄宗族座す所の常列を舍きて、而して自ら一行を作して、以て郷儀を壊乱し、聖教を蔑棄すべけんや。」

（「郷党序齒、以年之長少為坐次也。若分貴賤、則是序爵也。……豈可以一時一郷一二人微賤恥居其下之故、而輕變古今不易之典礼、舍父兄宗族所座之常列、而自作一行、以壊乱郷儀、蔑棄聖教乎。」<sup>(16)</sup>）

「大抵君子の吾が父兄におけるや、篤く孝悌之道を盡し、吾が親を尊び以て人之親に及ぼす、其の長を敬し以て人之長に及ぼす。年長ずるに以て倍すれば、則ち之に父事し、十年以て長ずれば則ち之に兄事し、五年以て長ずれば則ち之に肩隨す。仮に設けて彊ひて之を為すに非ず、皆吾が親を尊び吾が長を敬すより、其の余を推して以て之に及ぼす。」（「大抵君子於吾父兄、篤盡孝悌之道、尊吾親以及人之親、敬其長以及人之長。年長以倍、則父事之、十年以長、則兄事之、五年以長、則肩隨之。非仮設而彊為之、皆自尊吾親敬吾長而推其余以及之。〔李国弼〕」<sup>(17)</sup>）

さてそもそもこの温溪洞契が作成された理由は何であったのだろうか。「温溪洞中親契立議叙」と「吉事」・「凶事」・「講信」などを見

上の人を更に士族、庶孽、良人の有官職者に細分し、その身分内で年齢の序列を適用していたのとは異なることになる（前掲辺英浩「李栗谷の郷村、地域編成論」）。

(15) 註の(14) 参照。あと2例ほど引用しておく。ここからは郷村での士族の序列は、年齢にのみ従うことを力説する退溪と門閥にしたがうべきではないとする弟子たちの姿が浮かび上がる。弟子たちは退溪の説明にも拘わらず容易には納得できないようであり、本文にて後述するごとく、退溪は郷村における上下の対立を緩和すべく士族の徳性を高めんとしているのであるが、この師説に土豪の人物のみならず門弟たちさえもが懐疑的なのである。ここから退溪の志向性と当時の実態との乖離の大きさを読み取るべきであろうか。「郷人の学を志す者、或いは品官之列に隨ふを恥ず。先生曰わく、郷党は父兄宗族之在る所なるに、隨行を以て恥と為すは何の意なるや。或いは曰わく、門地卑微なる者、右に居る、実に牛後之恥有り。先生曰はく、郷之貴所は齒なり、下に居ると雖ども礼に於いて義に於いて何ぞ不可なること有らんや。〈金誠一〉」（「郷人

志学者、或恥隨品官之列、先生曰郷党父兄宗族之所在、以隨行為恥何意、或曰門地卑微者、居右、実有牛後之恥。先生曰郷之所貴者齒也、雖居下、於礼於義、有何不可。〈金誠一〉」）『退溪全書 四』195頁、「退溪先生言行録 處郷」「金富弼、富儀、富倫、琴應夾、應壩、酒を佩して以て先生に謁す。先生、郷座を貴賤に分つは之れ非にして、只だ当に古への齒座に依るべしと論ず。金富弼曰わく古今殊異にして是の如くすべからず、と。先生古今を援据し、終日極弁す。諸人路にて一詩を呈して云ふ、先生は上古の論、弟子は末世の言、書院の規模定まるも、何をもって郷座を分たんや。」（「金富弼、富儀、富倫、琴應夾、應壩、佩酒以謁先生、先生論郷座分貴賤之非、只当依古齒座、金富弼曰古今殊異、不可如是。先生援据古今、終日極弁、諸人路呈一詩云、先生上古論、弟子末世言、書院規模定、何須郷座分。」）〈李德弘〉『退溪全書 四』195頁、「退溪先生言行録 處郷」

(16) 『陶山全書 三』152頁、卷第五十四「答趙起伯 戊辰」

(17) 『退溪全書 四』196頁、「退溪先生言行録 處郷」

ると真城李氏の同族間の相互扶助が目的のひとつであるが、洞令とその説明にはもう一つの重要な目的が明示されている。以下に全文を引用しておく。なお吏読は原文に下線を引いて示し、『吏読集成』（中枢院編、国書刊行会、1975年）によって訳語を書き下し文中に挿入する。

「 洞令

- 一、本主他主、無礼不遜者、答五十倍
- 一、父母不順者、同
- 一、兄弟相鬪者、答五十加三
- 一、奸淫者、偷盜者、同
- 一、鬪毆相傷者、答五十加二
- 一、親戚不睦者、隣里不和者、同
- 一、墓山放火者、起田者、同
- 一、元居人招引者、同
- 一、奪耕者、曲防者、米穀刈取者、同
- 一、墓山伐木者、不根人許接者、答五十加一
- 一、群飲醉亂者、川防伐木者、田上流沙者、答五十
- 一、牛馬放牧者、答三十

右の洞令設立の本意は、洞中の居人は皆家門の奴婢なるに、以て漸やく無統難治に至り、已むを得ずして旧規に循ひ、此の若干条を立つ。皆其の重き者に就きて例と為す。其れ事の各条に係るも情として恕すべき者有れば、臨時に僉議し、其の故の誤りを審らかにし、的當に論決するが、もし条外に犯す所の者有れば、並びに不應為（律に明示していない輕犯罪）の事理・重輕之例（「講信」の末尾にある「輕罰、一巨觥。重者、臨時議論處事」のこと）に依りて裁處し、犯す者が奴婢に係らざる人であれば、洞中にて論決せず、他を告官に依りて治罪すべき事。（右洞令設立本意段、洞中居人、皆家門奴婢、以漸至無統難治、不得已循旧規、立此若干条。皆就其重者而為例。其有事係各条、而情可恕者、臨時

僉議、審其故誤、而的當論決為乎矣、如有条外所犯者、並依不應為事理、重輕之例、裁處為拊、犯者不係奴婢人是去等、洞中論決除良、依他告官治罪為乎乙事。 嘉靖三十九年庚申正月 日 [明宗十五年] (=一五六〇年)」

家門の奴婢の統制が徐々に困難になってきたためにやむを得ずこの洞令を作成したというのである。（「右の洞令設立の本意は、洞中の居人は皆家門の奴婢なるに、以て漸やく無統難治に至り、已むを得ずして旧規に循ひ、此の若干条を立つ」）。そして洞令の冒頭に「一、本主他主、無礼不遜者、答五十倍」と私奴婢に対する酷薄なまでの処断が規定されている。ただし、この段階では未だ奴婢や士族内部での処罰は洞内で処断することとされており、いわば未だ自治の範囲内とされている。もし洞外の良人がなんらかの形で犯罪に加わる場合は、その良人への処断のみは「告官治罪」とされている。（「犯す者が奴婢に係らざる人であれば、洞中にて論決せず、他を告官に依りて治罪すべき事」）。これは国法を順守した結果であり、それは次のこの洞令が制定された1560年と同年付けの退溪の書簡から明らかである。なおこの書簡は、この洞令が退溪と他の溫溪洞契の士族たちとが、緊密に協議しつつ、実質的に退溪によって作成されたことを裏づけるものでもある。

「示來の洞令、未だ尽くは處せず。書を補ひて送還照量す。大抵此の事、少しく未だ安んぜざるの意有るは、国法の私門にて人之罪を決すを許さざるの故なり。而して此の洞之人なれば、則ち皆一家の奴婢なり。故に以て此の令を行ふべき耳。若し犯す者の奴婢に干せず而して此の事を強行し、或いは不幸に値へば、則ち其の患ひ言ふに勝ふべからざる者有り。故に此の意を補入す。洞中須らく僉な



慎み萬萬として佳為るべし。云ふ所の拔劔放火等の事、其の罪小さからざるも、亦た条内に入れ難し。若し此の如き事有れば、只だ不應為の事理を以て重く之を處せ。其の治すべからざるは、官に告げて可為る耳。」（「示来洞令、未尽處。補書送還照量。大抵此事、有少未安之意者、国法不許私門決人之罪故也。而此洞之人、則皆一家奴婢。故可以行此令耳。若犯者、不干奴婢、而強行此事、或值不幸、則其患有不可勝言者。故補入此意。洞中須愈慎萬萬為佳。所云拔劔放火等事、其罪不小、亦難入条内。若有如此事、只以不應為事理、重處之。其不可治者、告官為可耳。）」<sup>(18)</sup>

なお溫溪洞契は1625年まで実施されていたとされるが（「扶助簿」には1626年までが、「洞中有司相遜」には1628年までの記録があるが？）、1560年以降、また退溪没（1570年）以後もますます奴婢の抵抗が激化していったようであり、そのために洞令の説明文にさらに追加の説明文が付されている<sup>(19)</sup>。洞内で処断しきれない奴婢と士族の犯罪の常態化が想定されて「終始拒逆者、告官重治事」とされるに至っている。

「昔我 先生（退溪）田園に退居し、奴婢の無統難治を深く慮り、此の条禁を立つ。其の紀綱を扶持する所以、至れり、美なり。而して今は則わち家門疎遠、或いは犯す所有るも、各々其の奴主は百端營救し罪罰を免れんと図り、奴も亦た其の頑悍を恃み、即わち罪に伏せず。並びに理無き為り。先生の美意の法、竟に文具と為れり。痛惜するに勝えず。各々別に申明し、今後ならば推し捉えよ。現れざる者は、各々条下にて付標しておき、後日に論決し、其れに加ふるが、終始拒逆する

者は、告官重治の事」。（「昔我 先生（退溪）退居田園、深慮奴婢無統難治、立此条禁。其所以扶持紀綱、至矣美矣。而今則家門疎遠、或有所犯、各其奴主百端營救、図免罪罰、奴亦恃其頑悍、不即伏罪。並為無理、先生美意法、竟為文具。不勝痛惜。各別申明、今後乙良推捉。不現者、各於条下付標為有可、後日論決、加其為乎矣、終始拒逆者、告官重治事」。）

ただし、退溪の生存時に奴婢の抵抗が弱かったといっても、それは相対的に言っているのみで、史料からは奴婢の強い抵抗が容易に読み取れる。先の1560年の退溪の書簡にも奴婢による「拔劔放火等の事」が触れられ、これが洞内で処断しきれない場合は、洞令に明文はないが「官に告げて可」なりといわれていた。「云ふ所の拔劔放火等の事、其の罪小さからざるも、亦た条内に入れ難し。若し此の如き事有れば、只だ不應為の事理を以て重く之を處せ。其の治すべからざるは、官に告げて可為る耳。」（所云拔劔放火等事、其罪不小、亦難入条内、若有如此事、只以不應為事理、重處之、其不可治者、告官為可耳）。

また以下の書簡は、奴婢の抵抗に関する退溪のヴィヴィッドな記述が見られる唯一の貴重な史料であるが、ここでは奴婢が自己の一族と図り上典＝主人を用意周到な計画のもとに殺害してしまうという最大の反抗に遭遇し、それを弾圧するために士族たちの団結を強く訴えている。

「恐れながら白す、凡そ金伊の孫伊におけるや、一なるは則ち班行、一なるは則ち隣里、一なるは則ち儕伴。其の生時より公然と其の妻を淫盜し、孫の妻も亦た本夫を凌蔑し、恣

(18) 『陶山全書 三』229頁、卷第五十七「答溫溪洞内庚申」

(19) 「昔我 先生（退溪）田園に退居し、奴婢の無統難

治を深く慮り、此の条禁を立つ」とあり、正確な年代は不明であるが、約条が追加された1615年か、溫溪洞契の末尾に李有道が説明文を書いた1625年であろうか。

まに淫奸を行ふ。孫伊の身死するに及びて、両情快幸にして、今始めて願を適ふ。凡そ金伊は本妻を無罪にして黜送し、経営を投合し、遂に奸謀を成す。彝倫を瀆乱し、風俗を敗壞す。罪の一なり。亡奴の家物、即時に収入するに忍びずして、(上典が) 全て其の妻に付すは亡奴の為に厚意を存するなり。孫の妻此れに因りて恣まに姦を為し、濫りに布穀雜物等を数多く隠匿、移置し、忍んで亡夫の己物を以て転じて奸夫の飽煖之計を作す。恩に背き義を滅す、並びに淫盜を作す。罪の二なり。(孫伊の妻の) 孫伊の上典におけるや、深く怨望を懷き、怒を中間にす。往来之人、口を極めて罵詈訾し、語は上典を逼す。罪の三なり。其の族類と、通同作謀し、之を亡きものとせんとすの状を為り出し、数人をして前託し招き引き去けり。凡そ金伊なれば則ち棒を挟みて追て後、以て衆人に示す。而して其の夜即ち還り、觀變を藏匿し、洞内を欺瞞し、故主を愚弄す。罪の四なり。洞内にて同議治罪しての後も、洞令を蔑視し、頑梗に抗拒し、略ぼ畏憚する無く、恣まに行ふこと益々甚だし。罪の五なり。右の人等の罪状此の如し。綱常に關係するも、原さざる所を赦せば、怙終賊刑なり(惡事を行ないながら自分の行為に自信を持ち改めようとしないうこと)。古も亦た典有り。私忿より出ずに非ず、義として当に治すべき所なり。今もし問わざれば、此れより洞令遂に廢れ、以て風俗を正して号令を行ふ無し。恐らくは痛治せざるべからざるなり。故に敢えて白す。」「(「恐白、凡金伊孫伊、一則班行、一則隣里、一則儕伴。自其生時、公然淫盜其妻、孫妻亦凌蔑本夫、恣行淫奸、及孫伊身死、兩情快幸、今始適願。凡

金伊本妻、無罪黜送、經營投合、遂成奸謀、瀆乱彝倫、敗壞風俗、罪一也。亡奴家物、不忍即時收入、全付其妻者、為亡奴存厚意也。孫妻因此恣為姦、濫布穀雜物等、数多隠匿、移置、忍以亡夫己物、転作奸夫飽煖之計、背恩滅義、並作淫盜、罪二也。於孫伊上典、深懷怨望、移怒於中間、往来之人、極口罵詈、語逼上典、罪三也。与其族類、通同作謀、為出亡之状、使数人前託招引、而去。凡金伊則挾棒追後、以示衆人、而其夜即還、藏匿觀變、欺瞞洞内、愚弄故主、罪四也。洞内同議治罪後、蔑視洞令、頑梗抗拒、略無畏憚、恣行益甚、罪五也。右人等罪状如此、關係綱常、赦所不原、怙終賊刑、古亦有典、非出私忿、義所当治。今若不問、自此洞令遂廢、無以正風俗、而行号令。恐不可不痛治。故敢白。」)<sup>(20)</sup>

洞令に「一、本主他主、無礼不遜者、答五十倍」と、本来上典と私奴婢の間の私的な支配従属關係が、兩班身分と奴婢身分の間の階級的支配従属關係に変質させられているが、それは士族個人や家門の個別的な力量では、史料に見えるごとく奴婢たちの団結した抵抗・反抗を抑えられなくなっていることを象徴的に表している。先に溫溪洞契の目的は士族の相互扶助と奴婢への統制であったと述べたが、ここにいたって、奴婢への統制のために士族相互の強い階級的・身分的団結が要請され、それに応えるものが溫溪洞契であったと正確な表現に修正しておく必要がある。

#### IV 上下洞約・郷約の成立

さて別稿「李栗谷の郷村、地域編成論」にて検討したごとく朱子の郷約と李栗谷の社倉契約

(20) 『陶山全書 三』229～230頁、卷第五十七「答溫溪

洞内」

束には、当然のごとく下人が構成員として包摂されているのに、何故に退溪の溫溪洞契には下人が包摂されていないのであろうか。その点をさぐるために16世紀前後の洞契、洞約の全般的状況を確認しておかねばならない。

朝鮮史においては遅くとも16世紀にはほぼ全国的に各洞（＝村落）毎に洞契が一般化しており、その名称は族契、洞約、郷村結契、洞隣契、香徒会など実に多様であったという。だがその場合、士族中心の洞契と下人による洞契が別個に存在するのが通例であり、両者が対抗関係に立ちつつ並存していた。今日まとまった史料として確認されるのは士族中心の洞契のみで、下人の洞契は残念ながら確認できず、断片的な記録からその存在を伺い知りうるのみである。それは下人のそれがそもそも文字記録として保存されなかったであろうという一般的事情に加えて、士族と下人との対抗関係が激化していく中

で士族の洞契に下人のそれが吸収されるか、あるいは士族によって破壊されていったためである。士族の洞契に下人のそれが吸収される事例も含めて、士族＝上の人と下人が同一の洞契の構成員となっている事例は、16世紀末の壬辰倭乱、すなわち豊臣秀吉による朝鮮侵略戦争以前にはさほど多くは見られなかったが、壬辰倭乱以後より17世紀にかけて急速に増加していくのである。それは下人の抵抗力が次第に強まり、士族が下人を一方的に支配することが困難になってきた結果、下人を同一の共同体成員としていったためといわれているが、壬辰倭乱は士族と下人との力関係において士族の力を大きく削ぎ、相対的に下人の力を増大させる結果をもたらしたのである。そして名称も洞契から洞約へと漸次的に変化していくようであり、先行研究はこの壬辰倭乱前後の社会変動を「洞契から洞約へ」と呼んで特徴づけようとしている<sup>(21)</sup>。

(21) 前掲鄭震英「解説篇」『嶺南郷約資料集成』。前掲同氏「16世紀安東地方の洞契」『嶺南史学』創刊号。壬辰倭乱以前に、上下がそれぞれ別の契を作成し、下人の契が士族によって破壊された例を引用しておく。「通一里為大契、上下俱入、下人中又各以其里、別作小契、或二十餘家、其□……□、入大契者、並許属。」『河回洞契』「作契」。「作契一通一里為大契、上下俱入為乎矣、下人中自前各立小契、不無分疎不一之弊、自今一切禁断為遺……。」『河回洞契』「附重設立議」(それぞれ「16世紀安東地方の洞契」7頁、2頁)。

戦乱の与えた影響は多方面に及ぼうが、士族の下人支配に与えた影響、すなわち上下洞約・郷約の成立もその最たるものの一つであり、洞契を作成し団結を強めることにより辛うじて維持しえてきたそれまでの下人に対する支配方式は変更を余儀なくされたのである。鄭震英氏によればその理由として次の二点が指摘されている。同氏「解説篇」12～13頁。

一つは、「多大な人命と財産の喪失による郷村社会の疲弊のため、乱前の如く士族のみの相互扶助は現実的に不可能となり、これと同時に戦後復旧のためにも下層民の積極的な協調が切実であった」ためである。「……而況辰巳以還、人消物尽、一縣之人、殆不滿数十、一洞之居、亦不過數三、晨星落落、遼鶴寥寥、有族親多財力、能不資隣保之力者、有幾人哉、若不結

疎遠為親密、合里間為一洞、以相扶相勸、則零丁孤苦、踽踽涼涼、其生也誰與為歌、其死也誰與為哭耶。」徐思遠(1550～1615年)、『樂齋先生文集』巻七、「河東里社契約序」

もう一つは、下人たちの抵抗からの説明である。下人たちの抵抗は壬辰倭乱以前から強力になっていたが、それが「壬辰倭乱を経て一層強まってきていたことは周知の事実であるが、安東の場合は下人が蜂起し、それを鎮圧するために士族たちにより義軍が組織されたほどであった。壬辰倭乱後における上下洞約・郷約の成立は「両班層が彼らの結束のみによっては下層民を一方的に統制できなくなったことを意味しており、したがって下層民を郷村社会の構成員として認めざるをえなかったのである」。

「庭栢……壬辰倭寇變、郡県不守、主將逃遁、乘輿西巡、命令不行、統紀陵夷、土賊蜂起、一郷推為義將……」李庭絵『松潤先生文集』巻一、「世傳遺録」

鄭氏の挙げる理由は戦後復旧と下人の抵抗の強化というものであった。だが、第一の理由についても、下人の士族への抵抗という面からの説明がより有効である。士族は、下人の反抗を抑えるべく洞契を作成し団結を強化し、それにより辛うじて下人に対する支配を維持しえてきたのだが、ここにいたって支配者側の士

ところで温溪洞契は1625年（1628年？）まで実施されていたとされるが、退溪没（1570年）以後も温溪洞契には下人が加えられていない。士族と下人を共に構成員とした場合、経済的負担能力に大きな差があるため、注意深く士族と下人の負担内容を区別する必要があるし、実際にも区別しているのだが、温溪洞契の1615年の追加約条を見てもそういった形跡は見出せない。しかし壬辰倭乱後、礼安県の周辺では退溪の門弟たちにより下人を包摂した洞約・郷約が作成されつつあった。琴蘭秀（1530～1604年）が礼安県夫浦洞にて作成した『洞中約条小識』では奴婢を含む下人を洞約構成員とし、約条も「上下通行事」の8条と「下人勸懲事」6条を設けている。『郷立約条』と『洞中族契』とは皆是れ良法美意なり。而して変乱より以後人心日々に益々渇薄にして刑杖笞罰を以て勸懲を為すべからざるなり。故に蘭秀夫浦洞中に於いて約条を別立し、人情に因りて以て之を導く。下人・賤隸は名分は殊なると雖ども同じく天命の性を受くれば、則ち豈に鄙夷し之が為めに勧誘し同じく至善の地に帰せざるべけんや。」（『嶺南郷約資料集成』112頁。）また先述した金圻の郷約では下人の士族とは異なる状況を考慮して、退溪の郷立約条には見られなかった士族とは別個

の下人約条を「此れ以下、今補ふ」と注記した後に、列挙しており、また「患亂相恤」の項目において、下人の負担能力を考慮すべきことを強調し、各約条において士族とは別個に下人の負担を具体的に注記している。

「退溪先生の約条、各々米・太各五升・常紙一卷・空石四葉・役奴二名を出だす。極めて中を得たり（温溪洞契の「凶事」の割註のこと）。而して但だ念ふに窮民は一升之米も其の乏絶に當たりては、亦た猝辦し難し。或いは賻助之際、未だ參差あるを免れざるを慮る。」（「退溪先生約条、各出米太各五升・常紙一卷・空石四葉・役奴二名、極為得中。而但念窮民一升之米、當其乏絶、亦難猝辦、或慮賻助之際、未免參差」。）

「士族は則ち各々奴二名を出だす。小民は則ち役夫一名。」（「士族則各出奴二名、小民則役夫一名」）

「毎歳十月、米太を収む。多くも五升を過ぎず、小なくも二升を下らず。」（「毎歳十月収米太、多不過五升、小不下二升。」）

参考までに1677年～1846年に実施された「溪上洞契」を見ておこう。「溪上洞契」は「温溪洞契」に参加していた者で、遠方に居住し周辺に人も多いために温溪洞への参加が困難であっ

族数の激減により下人の反抗を抑えられなくなり、やむをえざる対応として士族と下人を同一の洞約・郷約構成員とするに至ったというのが、より事態の本質に近い。士族が下人への統制力を維持しえているならば、力関係からして下人たちからの協力（積極的な協力とは言えないが）を引出すことが可能であろうが、戦乱後はその力関係が変化したのである。また鄭氏の挙げる第二の理由はもう少し補足説明が必要である。壬辰倭乱を経て下人の抵抗が益々強化されていったのはいかなる理由によるのであろうか。これは士族の武装力がほぼ全面的に外敵への対処に向けられざるをえず、またその戦闘の結果士族の武装力が弱体化することもありうる状況のもとで、その力の空白地帯の中で初めて下人の大規模な反乱が可能となったのである。この

時期李朝政府は財源補填策として告身や職帖などを乱発し金銭や米で買い取らせ、その結果賤人から良人へ、良人から両班へという身分上昇の機会が与えられたが、これは強い外圧と内部での下人の反乱という内憂外患への対処として、内部の身分・階級対立を緩和させざるをえなかったための政策でもあり、この集権化志向政策は外敵の脅威が観念の中に存在し続ける限り維持される。この二つ目の理由とも関連するが、戦争により一時的にせよ在地両班の最後の依り所である官軍の力が及ばない地域が増大し、在地士族たちは独力でもって内憂外患に対処せざるをえず、いよいよもって内部での対立を緩和する必要が切実であったことも理由の一つに加えておく必要があろう。



た者たちが、溫溪洞契から分離して作成したものである。「願遠居而人稠、有難於糾合、又自此而分、以為溪上契、實自我右侍郎府君始、而今已百有余年矣。……純祖八年（1808年）戊辰十月二十日壬子李家淳謹識」。

「丁巳十月十三日規約 肅宗三年（1677年）」の約条からは以下のごとく下人が含まれていることが判明する。

「一、約中に火災有れば上下相会し、救い且つ之を吊す。各々空石・蓋草・長木を出し、力を同せて造成す。……田に服する能わざれば、則ち上下を通じて、各々農軍を出し、或いは耕し或いは種し、或いは耘し或いは穫す。

（ 中 略 ）

一、約中に喪有れば上下齋会し、……兩班は則ち各々壯奴一名を出し、常人は則ち役夫一名を出す。」（「一、約中有火災、上下相会、救且吊之、各出空石・蓋草・長木、同力造成。……不能服田、則通上下、各出農軍、或耕或種、或耘或穫。（中略）一、約中有喪、上下齋会、……兩班則各出壯奴一名、常人則出役夫一名。」）

それは1630、1631年以後士族と下人の対立が急激に深刻化してきた事態へのやむをえざる対処であった。

「辛酉（1621）年より栢洞契憲を設立す、今下に至りて廢さる。而して歲月既に久しく、未だ犯綱之解弛を免れず。又庚辛兩年（1630、1631年）を経ての後、人心強悍にして、廉恥の道喪わる。上は檢飭するを得ず、下は承順なる能はず。洞中の凡事、觀るに足るべきもの無し。茲を以て洞規を重修し、以て永久遵行之地とす。上下之を共にせよ。自今以後、もし規約に従はず、恣に行ひて忌むこと無き

者有れば、僉議重治のこと。而して其の罪に服さざる者は、則ち告官重治の事」。（「自辛酉年、設立栢洞契憲、至今下廢、而歲月既久、未免犯綱之解弛、又經庚辛兩年之後、人心強悍、廉恥道喪、上不得檢飭、下不能承順、洞中凡事、無足可觀、茲以重修洞規、以為永久遵行之地、上下共之、自今以後、如有不從規約、恣行無忌者、僉議重治、而不服其罪者、則告官重治事」）

溫溪洞契は1625年（1628年？）まで実施されていたが、溫溪洞でもまた1630年前後に上下の対立が激化し、大きな転機を迎えていただろうことは十分に推測される。李栗谷における上下洞約・郷約は忠清道清州牧での「西原郷約」（1571年）と黄海道海州牧野頭村での「社会契約束」（1577年）であるが、退溪の居住地においてもやや遅れて1630年前後に上下洞約成立の方向にあったことが示唆されていたと受け取ってよかろう。朝鮮史では壬辰倭乱の間にはさんだ16世紀後半～17世紀前半に上下の洞約・郷約成立が一般化していく。

ところで朝鮮史では下人が経営主体として成熟をとげ、17世紀後期よりある種の商品生産が展開してくるその直前の時期より上下洞約が広範に成立してくるのに対して、中国史の場合、佃戸＝小作、主戸＝自作が未だ経営主体として相当未熟である段階より、朱子に見られるごとく、当然のように下人を郷約の構成員としていた。そもそも、下人を郷約の構成員とするということは、いかなる意味があるのであろう。

中国の宋代では士大夫は、南下する遊牧民に対処すべく、自らは武装を放棄して個々の軍事的階序機構を構築することなく、武力を完全に統一権力に集中させ、統一権力の軍事力に依存することにより自らの佃戸支配を貫徹したのであった。朱子が郷村の最底辺の直接生産者・生

産主体である佃戸までを構成員としたのは、佃戸との対立を自己保有の強制力により抑えることができない中国の封建的支配階級たる地主＝士大夫が、日常的な佃戸支配を貫徹するべく封建的身分の論理のみならず血縁的（非支配的・平和的）論理を一貫して追及し続けたためであった。この点でヨーロッパの中世封建社会や日本の近世封建社会において封建的支配者である領主・武士が基本的に自己保有の軍勢力による経済外強制力で農民を支配し、封建的支配者と被支配者とが同一の共同体構成員とされる事態はありえなかったのと極めて対照的である。

朝鮮史では伝統的に南の日本・北の満州、そして西北の中国という三方向よりの外圧に晒され続け、封建段階に到達した李朝も、この外圧によって中国と類似の集権国家として成立した。李朝成立初期に個々の地主はその組織的な軍勢力を解体されて、武力は統一権力のもとに集中され、李朝は外形的には中国と類似した中央集権国家として成立したのであった。しかし、その受ける外圧の強度に中国と朝鮮とでは径庭が存在し、そのため朝鮮の在地士族は完全に軍勢力を解体されなかったようであり、特に李朝後期に緩和されていくものの文科挙受験を禁止された庶孽層にそれは色濃く、また郷所を通じた地方官下の軍勢力を行使することもありえた<sup>(22)</sup>。経営主体である下人と同一の村落に居住する在地士族は基本的な軍勢力は統一権力に預け、下人との間でなんらかの共同性を追及せざるをえない一方で、その強い貴賤観念・特権身分意識からしても下人を力によって抑えこめるうちは

下人を自己と同一の共同体構成員として認めないであろう。

そのような状況の中で小作や自作が経営主体として一層の成長を遂げて士族への抵抗力を強めてきた時点で、すなわち統一権力を是認する在地士族たちは自己保有の一定の武力を持ってしてはもはや従来の秩序を維持できなくなる時点で、上下の対立を緩和するべく血縁的論理・家族主義的心情の作興を図らねばならなくなり、この方向にそって二つの試みがなされていく。一つは、下人に上下の対立を緩和するために家族主義的倫理を深く内面化していくこと、もう一つは、士族自身が武断的行為を抑制し道徳性を高め、下人からの内面的服従をより自然に引き出すことである。

中国の宋代以降の村落共同体の内部には地主、主戸＝自作、佃戸＝小作という実質的な不平等が孕まれていたために、朱子はその対立を緩和するべく、家父長制的、家族主義的倫理を説き、この倫理を共同体成員、特に自作と小作に内面化させるために増損呂氏郷約を作成した<sup>(23)</sup>。李朝でも村落共同体の内部には地主、自作、小作という実質的な不平等が孕まれていた点は、中国と同様であるが、上下の対立はそれ以上であった。そのため上下の対立を緩和すべく朱子の郷約で説かれる儒教的徳目、家族主義的倫理が積極的に採用され、朝鮮社会に伝統的に存在していた洞契や洞約に合体させられていったのである。また、朱子においては、士族の徳性を高める方法は科挙試験準備に委ねられ、それ以外の特別な制度や方法は考えられていなかったのに

(22) 管野修一「李朝後期における郷所の軍勢力掌握について―民乱の事例を中心に―」『大阪市立大学 人文論叢』第9号、1981年。辺英浩「朝鮮封建ナショナリズムの構造と展開」、「李栗谷の郷村、地域編成論」。辺英浩「権力論における李栗谷と朱子」『神戸大学史学年報』第6号、1991年。

(23) 守本順一郎「朱子の生産論」『東洋政治思想史研究』未来社、1967年初版、1996年再版。また、岩間一雄『ナショナリズムとは何か』（西日本法規出版株式会社、1987年）三章、四章、補論と同氏「陽明の生産論」『中国政治思想史研究』未来社、1968年初版、1990年再版も参照。

対して、朝鮮の場合朱子には見られない士族のみを対象とした郷約や郷規と郷約が合体させられる現象が、李朝成立後より一般的に見られた。これは朝鮮の科挙が、庶孽が文科挙受験を禁止され、内容もより簡略で専用の試験用の建物がないことなどから、中国の場合よりも不正が行なわれ、その結果士族の文人素養が中国の士大夫に比して低かったためと考えられるが、これもまた朝鮮両班<sup>ヤンバン</sup>=士族の武的要素の強さの一表現でもある。そして、栗谷は前者に対して「社倉契約束」を、後者に対して「海州郷約」と「海州一郷約束」を用意周到に作成していた。ただし朱子の場合は構成員は身分に関わりなく年齢によって序列化されていたのに対して、栗谷の社倉契約束は朝鮮の士族=両班の特権的性格を前面化させ、当然の如く士族と下人との間に隔絶的差異を設定し、上下の各身分内でのみ年齢によって序列化していたのである<sup>(24)</sup>。

退溪の場合は先に見たごとく下人を士族中心の洞約・郷約に包摂することを強く拒否し続け、彼の上下対立緩和の努力は士族の徳性向上にのみ向けられており、溫溪洞契と郷立約条は士族の自己規制、相互規制をその主たる目的としていた。郷立約条では、在地社会の秩序を破壊する「郷長陵辱者<極罰> 不顧廉恥、汚壞士風者。恃強陵弱、侵奪起争者。無頼結党、多行狂悖者<中罰>」などの土豪的武断行為を禁止し、特に「多接戸戸、不服官役者 不謹租賦、図免徭役者」の二条が士族の一致した理解を得られなかったという先述したエピソードは、当時の実情と退溪の志向性を明瞭に浮び上がらせている。この点でもう一つ記しておかねばならない

のが、在地士族の徳性涵養の場としての書院への着目であった。豊基郡守であった49才の時に白雲洞書院のために扁額と書籍を国王に請い、認められているが、これは朝鮮における賜額書院の嚆矢となったという<sup>(25)</sup>。ともかく、退溪の場合、洞約を実施した地域が朝鮮在地両班の本拠地とでもいうべき慶尚道であり、しかも両班と私奴婢のみ居住する典型的な両班の同族村落であったという地域的特性もあってか、退溪の生存時には奴婢の抵抗力は強まりつつあるものの、未だ士族たちの団結によって抑えうという程度であった。退溪と栗谷の差異、すなわち上下洞約を作成したのか否かは、単に彼らが直面した下人の抵抗力の差異の結果であろう。

## V 統一権力=官と地域

さて、両班の徳性を高めるということは、一面において研究史上にていわれる16世紀後期における両班身分の確立という事態を指し示しているのであるが、実はこの両班身分の確立は郷村・地域内での上下対立を緩和するのみにとどまらない意味があり、地域と統一権力=官との関係をも視野に入れて見る必要がある。在地士族たちは郷案を作成し、郷所構成員=在地社会の支配エリートを明確化していたが、16世紀後期には郷案より漸次的に両班身分以外の者を排除し、構成員を両班身分に純化していった。例えば慶尚道の安東の1530年の「嘉靖郷案」には士族の外に、在地社会でいまだ根強い実力を有していた郷吏の本孫・女婿・外孫が含まれていたが、1589年の郷案である「萬歴郷録」では士

(24) ただし厳密に言えば栗谷は上の人をさらに、士族、庶孽、良人の有官職者に、下人も無官職の良人と賤人に細分し、その細分された身分内で年齢の序列を適用していた。辺英浩「李栗谷の郷村、地域編成論」、及

び註(14) 参照

(25) 「年譜上」『退溪全書』四、景仁文化社、1971年、121頁

族以外の者は排除されていた<sup>(26)</sup>。また1581年の退溪の弟子の鄭士誠によって作成された郷約では、この郷案入録資格の内容がより詳細に記されている。それによれば、両班の庶腹子である庶孽と郷吏に派が連なる者は清族〔郷(案)に参ずる頭閥〕との4・5世代に及ぶ通婚後に郷案入録を許す、郷吏の直派は洗濯〔科名清頭之類〕後の清族との4・5世代に及ぶ通婚後に郷案入録を許す、と原則的に庶孽と郷吏の郷案入録を排除している。そのみならずたとえ両班であっても、貧賤のために軍士や百姓家と婚姻した者は清族との4・5世代の通婚後に郷案入録を許す、他地方の官人にして婚姻により当地に入郷した者と当地の両班で婚姻により他地方に移住した者は原則として郷録入案を認めない、内外郷に咎がなくとも自身に累のある者は大段の事〔乱倫敗常の如し〕でなければ郷案に参ずるを許すが付票する〔離行損徒の類の如し〕、乱倫敗常の罪を犯した者の子孫は蓋愆〔操行卓爾の類〕と洗濯でなければ、また代が遠ければ郷案入録を許さない、というごとく血統の純粋さと高い徳行を厳格に要求している<sup>(27)</sup>。

一般に両班階級の身分としての確立といわれるこの16世紀後半の現象の意味をより明確化するために当時の士林派と勲旧派の権力闘争の意味を在地社会の次元で明らかにしておかねばならない<sup>(28)</sup>。15世紀後半より、地租は低額固定化されていくが、それと反比例して貢納・進上と軍役の負担は増大していった。特に官庁に必要な物品を農民や手工業者たちより直接現物徴収する貢納制の運営において現われた防納が大問

題であった。国家と農民、手工業者との間に介在する貢納請負人が現れ、貢納品をその特産地等で買入れ国家に上納し、その代価を農民、手工業者たちから徴収するようになったが、その代価はしばしば本来の価格の数倍、数十倍にも達したのである。また軍役においても防納とほぼ類似のメカニズムを持つ強制的布納化という不法的な収奪の無際限の増加が見られ、軍隊の消滅化という戦慄すべき事態が出現しつつあった。すなわち勲旧派とは、文字通りには中央政界で「非理」行為を行なう権力者である功臣や王族の姻戚であるが、広い意味でいえばこの時期に士林派から「非理」行為を糾弾された防納や軍役の布納化などの不正収奪で私利追及を図る郷吏や商人、在地社会でこの非理行為に加担した在地地主＝土豪たち、そして以上の勢力から利益を吸上げると同時に保護を与えた中央政界の権力担当者たちの総称といっておくべきであろう。念のために言っておけば、勲旧派を中央集権派とする誤った理解がみられるが、勲旧派はその徹底的な私利追及の結果、国家的負担を担う良人農民を流亡化させて統一権力それ自体を破壊してしまいかねなかったのであるから、中央権力の担当者ではあっても中央集権派などでは決してない。敢えて言えば、統一権力破壊派と言うべき存在である。

ともかく勲旧派優位の時期に現われた不正な中間収奪の増加により、良人農民の逃亡は増大し続け、その多くは在地地主勢力の農荘に投託し私奴婢となった。この結果は、国家歳入の減少、軍隊の消滅化という、まことに危惧すべき事態の現出であった。だが、支配階級の私的な

(26) 鄭震英「朝鮮前期安東府在地士族の郷村支配」『大丘史学』27輯、1985年、86頁

(27) 前掲『嶺南郷約資料集成』109頁

(28) 以下の段落は、辺英浩「士林派の歴史的位罫」『大

阪経済法科大学アジア研究所年報』第四号、1991年を参照。また李泰鎮『韓国社会史研究－農業技術の発達と社会変動－』知識産業社、1986年も参照。



利益は損失を被るどころか、士林派の場合でさえ、地租の低額化、農莊の拡大などに見られるように私的利益を拡大していた。しかし支配階級で、集権的官僚制形態をとる統一国家を前提とする者であれば、自己の私利追及のみならず、自己の私的利益を最終的に保証してくれるはずの公的、国家的な枠組みが何等かの形で必要であることを意識せざるを得ず、公的・国家的機構を破壊してしまいかねない勲旧派的な無制約的私利追及を批判し、国家的負担を担う一定数の良人を確保・保護せんとするであろう。私と公とは、また集権と分権とはあるレベルにおいてバランスを達成せねばならないのであり、士林派による勲旧派の無制約的私利追及に対する批判と「公道」・「理」の強調とは、このような文脈の中で理解されねばならない。この時期の士林派とは、15世紀前期よりは一定程度「私」を拡大しつつ、その延長上で「公」とのバランスを回復せんとしていた勢力の総称である。時折、在地の中小地主層が多数を占めていたという理由により士林派を地方分権派と理解する例が散見され、また文字通り士林派を「公道」・「理」の追及者とすればそこからは中央集権派という理解が引き出されかねないが、共に一面に失した誤った理解である。

それでは士林派が在地社会において追及する方向はいかなるものであろうか。上記から容易に理解されるように、自己の農莊は維持しつつ、主たる国役負担者である良人農民を一層没落させる原因を除去せんとする方向であろう。それは具体的にいえば、勲旧派的な不正収奪のメカニズムに連なる地方官や郷吏、及び商人、土豪勢力を厳しく統制していく方向であり、士林派を代表する退溪も栗谷も共にこの方向での強い統制を追及している。

退溪が作成した「郷立約条」では郷所を実施

の責任主体としたうえで、約条の末尾に「元悪郷吏 人吏民間作弊者 貢物使濫徴價物者 庶人陵蔑士族者 已上隨見聞、摘發告官、依律科罪」としていた。庶人で士族を陵蔑する者は当然として、さらに郷吏とその下で服務する人吏、及び貢物使で價物を濫徴する者が、郷所より強く統制されている。貢物使で價物を濫徴する者とは、郷吏・人吏であったり、商人であったりしようが、かならずしもそれに限る必要はなく、要するに防納行為に連なる行為者全体の事と理解して差し支えなからう。それが士族の場合は、「事涉官府、有関郷風者。妄作威勢、擾官公私者<極罰> 受官差任、憑公作弊者<中罰>」という規定が特別に見える。例え両班であっても在地社会の秩序を破壊する勲旧派的行為に連なる土豪は厳しく統制されているのである。

退溪の郷立約条に該当する栗谷の海州一郷約束はこの統制の内容を一層具体的に、詳細に規定している。郷所が郷吏に対する一定の任命権を保持しているのみならず、さらに郷吏・人吏ら実務担当者の民間での権力の濫用と士族（品官）に対する陵辱行為を官に報告したうえで処罰するが、その際もし地方官（城主）が郷所の報告を信用せず郷吏たちをかばえば、郷所は地方官に対しても圧力を加えるのである。

- 「1、郷吏中にて清謹の吏を選択し、簿を置き善を勧む。上戸長・吏房は必ず清謹者を以て望に備え差定す。若し他岐図得者有れば、公事を行なうを許す勿かれ。
- 2、凡そ郷吏・書員・官人等の善惡籍置簿冊は、春秋の講信時に進呈の事。郷所は申明、撿挙の事。」（「郷吏中選択清謹吏、置簿勸善。上戸長・吏房必以清謹者備望差定。若有他岐図得者、勿許行公事」。
- 「凡郷吏・書員・官人等、善惡籍置簿冊、

春秋講信時、進呈事。郷所申明、檢挙事」)<sup>(29)</sup>

「郷所は専ら吏民の風俗を糾檢するを掌る。もし郷吏・書員輩官属にして、汎濫に事を用い、民間にて作弊し、及び品官を陵辱する者有れば、則ち官に告げ治罪す。治罪すべくして治せざるは、則ち郷所に罪有り。もし城主、郷所の言を信ぜずして吏輩官属の罪、関重なれば則ち一郷齊会、立庭し罪を請う。」(「郷所專掌糾檢吏民風俗。若有郷吏・書員輩官属、汎濫用事、作弊民間、及陵辱品官者、則告官治罪。可治罪而不治者、則郷所有罪。若城主不信郷所之言、而吏輩官属之罪関重、則一郷齊会、立庭請罪。」)<sup>(30)</sup>

栗谷と退溪は同じく、郷所を是認しているごとく、朱子以上に分権を拡大した上で、統一権力を破壊しつつあった勲旧派の在地秩序を変更し集権権力の再建を志向していたのである。だが、郷所による地方官や郷吏らの実務担当者らの勲旧派の勢力への統制の内容は栗谷の方がより詳細、且つ具体的であり、栗谷は相対的に、地方官＝統一権力との関係において在地両班＝郷所により高い地位を認めていることを示唆しているようである。そうであれば栗谷の方が退溪よりも分権を拡大していることになるのだが、それは以下に見るごとく社倉契約束と溫溪洞契の処罰規定においてより明確になっている。

栗谷の社倉契約束では処罰規定を上罰・次上罰・中罰・次中罰・下罰の5等級を設定している。

「上罰〔士類なれば則ち立庭。議事罷めて後乃ち止む。飲食時に末端に別座せしめ以て罰を示す。……○下人なれば則ち答四十。〕

次上罰〔士類なれば則ち満座にて面責す。……

○下人なれば則ち答三十〕

中罰〔士類なれば則ち西壁以上にて面責す。……

…○下人なれば則ち答二十〕

次中罰〔士類なれば則ち尊位及び有司以上にて面責す。……○下人なれば則ち答一十〕

下罰〔士類なれば則ち位を出て座し罰一觥。……

○下人なれば則ち下人処にて面責す〕

(「上罰〔士類則立庭。議事罷後乃止。飲食時使別座末端、以示罰。……○下人則答四十。〕 次上罰〔士類則満座面責。……

○下人則答三十〕 中罰〔士類則西壁以上

面責。……○下人則答二十〕 次中罰〔士

類則尊位及有司以上面責。……○下人則答一

十〕 下罰〔士類則出位座罰一觥。……○

下人則下人処面責〕)<sup>(31)</sup>

そしてこの上罰を越える行為に対しては官に告げ治罪し、社倉契約束からも追放すると規定されている。

「1、必ず不孝・不友・淫姦・贓汚等大段の悖理の行有りて、然る後に乃ち善籍を交す。而して黜約し、具に官に告げ治罪す」。

「2、凡そ大過悪有る者及び累次なれば罰を論ず。終に自ら悛めず、約令を壊敗する者なれば皆官に告げ、治罪して後に黜契す。」

(「必有不孝・不友・淫姦・贓汚等大段悖理行、然後乃交善籍。而黜約具告官治罪」。「凡有大過悪者、及累次論罰。終不自悛、壊敗約令者、皆告官治罪、後黜契。」)<sup>(32)</sup>

ここでは士族の下人(＝良人と賤人)に対する裁判権は上罰(答四十)まで、それを越える

(29)『栗谷全書一』驪江出版社、1958年、366頁。巻16、54張右

(30)同上365頁、巻16、53張

(31)同上357頁 巻16、36張左～37張右

(32)同上355頁、巻16、33張右。同上355頁、巻16、36張左

場合は官の担当とされている。これに対して退溪の溫溪洞契では、先にも見たごとく当時の国法を遵守し、賤人に対しては士族による裁判権を全面的に認めるのに対して、良人には士族による裁判権を禁止して国法＝官に委ねており、それは先述の書簡においても確認した。

「右の洞令設立の本意は、洞中の居人は皆家門の奴婢なるに、以て漸やく無統難治に至り、已むを得ずして旧規に循ひ、此の若干条を立つ。……犯す者が奴婢に係らざる人であれば、洞中にて論決せず、他を告官に依りて治罪すべき事」<sup>(33)</sup>。

「示来の洞令、未だ尽くは處せず。書を補ひて送還照量す。大抵此の事、少しく未だ安んぜざるの意有るは、国法の私門にて人之罪を決すを許さざるの故なり。而して此の洞之人なれば、則ち皆一家の奴婢なり。故に以て此の令を行ふべき耳。若し犯す者の奴婢に干せず而して此の事を強行し、或いは不幸に値へば、則ち其の患ひ言ふに勝ふべからざる者有り。故に此の意を補入す」<sup>(34)</sup>。

栗谷の場合下人に対しては、答四十までの裁判権を在地士族が、それを越えるものは官が担当するとする如く、下人の経営主体としての成熟を包摂した両班が領主的裁判権の部分的な分有を要求し、在地士族＝地域の側から統一権力に対して制約を付せんとしており、これは彼の気＝個別の相対的拡大の具体的内容であった。一方、退溪の場合は防納などの在地社会秩序を動揺させる行為に関係する局面では、地方官や郷吏に対しても制約を付せんとする方向を追求しながらも、裁判権の局面では当時の国法の全面的な遵守＝官権の絶対性を是認していた。これが彼の主理主義＝全体主義の具体的な内容で

ある。統一権力＝官権の絶対性を認める点で、退溪は朱子と同一であり、栗谷は統一権力の否定にまでは到らないが相対的に日本やヨーロッパの領主制的封建社会に接近していたのである。

なお、賤人をめぐる朱子と退溪・栗谷の相違については今少し説明が必要であろう。まず朱子と退溪についてである。李朝では基本的に軍役などの国役負担者である良人とそうでない賤人とが身分的に区別されていたが、宋代以降の中国では国役と身分との関係が希薄であったためか、賤人身分は消滅し、朱子も士大夫と良人のみを郷村構成員としてとらえていた。朱子は地主＝士大夫の良人(佃戸・主戸)に対する裁判権を認めず、官＝統一権力にそれを委ねており<sup>(35)</sup>、他方退溪は賤人に対しては両班に全面的に裁判権を委ねていたが、これは朝鮮と中国の身分と国役体系の相違・両封建社会の類型的相違を反映したものであり、統一権力の絶対性を是認するという点での両者の本質的差異を意味するものでは毫もない。

次に賤人に対する退溪と栗谷の相違である。士族の賤人に対する裁判権を退溪は全面的に認め、他方栗谷は答四十までしか認めておらず、表面的に見ればこの点においては退溪の方が統一権力に大きな制約を付しているようにも思われよう。しかし両者の違いを静態的にでなく、動態的に時間の順序に従って考察せねばならない。退溪の場合奴婢が抵抗力を強めてきたのにもない士族と賤人との個人的な支配隷属関係とされるべきところが、士族身分と賤人身分のもの全体の間での階級的対抗関係に変質させられ、さらに書簡中にて言うように士族たちが奴婢を処断しきれない場合は官に告げて可なり(「其の治すべからざるは、官に告げて可為る耳」)

(33) 「溫溪洞契」『嶺南郷約資料集成』121頁

(34) 『陶山全書 三』229頁、卷第五十七 答溫溪洞内

庚申

(35) 前掲拙稿『李栗谷の郷村・地域編成論』158頁。

とさえされていた。この後奴婢を含めて下人全体の抵抗が強まってくれば、上下の対立を緩和するべく洞約・郷約に下人を包摂していくと同時に、奴婢の「告官治罪」が常態化し、在地土族の奴婢に対する全面的な裁判権は次第に形骸化していこう。国法と現実とのズレが大きくなればなる程、また生産主体としての賤人と良人との実態的差異が縮小すればする程、良人と賤人とを区別せず下人として一括する方向へいくであろうし、現実にもそうなっていた。ただし退溪の主理主義＝全体主義の延長上で下人を一括した上下洞約・郷約が作成されていけば、在地土族の裁判権を認めがたいであろうが、琴蘭秀の『洞中約条小織』はその一例である。「洞約に違逆し順はざる者は罰を定む。罰を定めて行わざる者と、<sup>とも</sup>悛めざる者は与に同じく参ぜしむること勿かれ。之をして孤立せしむ。甚だしければ、則ち洞中より官司に報じ治罪し懲戒せしむる事」。また何らかの事情により退溪の影響を受けながらも在地土族に裁判権を認める事例も出てくるが、その場合でも栗谷的主気主義＝個別主義よりも、在地土族と統一権力との関係において統一権力により大きな権力を付与していく可能性が予測される。例えば金圻の郷約では、以下の如く在地土族の裁判権は答二十まで、それを越えるものは官が担当するとされているが、この答二十というのは栗谷が答四十としたものの半分である。「重罪は則ち官司に報ず。軽罪は則ち答二十に限りて論断す。答三十以上は官決」。

## VI 結びにかえて

最後に結論を要約して結びとしよう。朱子生存時の宋代の中国は、未だ経営主体としての佃戸は未熟で統一権力に対する地方の自立性も未熟であったが、強大な外圧に直面していた。朱子はこの強大な外圧を強く意識化することにより、集権化を希求して、統一権力の絶対性を主張した。これが朱子における全体主義＝主理主義であった。それに対して退溪と栗谷の登場した16世紀の朝鮮では、相対的に経営主体としての小作＝佃戸は成熟を遂げ、それを土台として地方の自立性も増大してきており、三方向からの外圧はあるものの、それは宋代中国の受けていた外圧との比較でいえば相対的に微弱であった。しかし退溪は相対的に微弱とはいえ、この外圧を強く意識して、当時の東アジアの国際的安全保障システムであった冊封体制を肯定していたが、朝鮮国内においても統一権力の絶対性を主張し、地方が中央の統制から離れて自立していくことを強く牽制しており、これが退溪の全体主義の内容であった。他方栗谷の場合は、冊封体制への懐疑心を拡大し、朝鮮の自立性・個別性を相対的に拡大していたが、朝鮮国内においても統一権力に対して地方の自立性を相対的に拡大しており、これが栗谷の主気主義＝個別主義の内容であった。以上により、朱子・退溪・栗谷三者の相違をほぼ明らかならしめえたかと思われる。